

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

ツリー・オブ・ライフ

2011年・アメリカ映画
配給/ウォルト・ディズニー・スタジオ・ジャパン
138分

2011(平成23)年6月16日鑑賞

大阪ステーションシティシネマ

Data

脚本・監督: テレンス・マリック
出演: ブラッド・ピット/ショーン・ペン/ジェシカ・チャス
ティン/フィオナ・ショウ/
ハンター・マクラケン/ララ
ミー・エップラー/タイ・シ
エリダン

👁️👁️ みどころ

2011年の第64回カンヌ国際映画祭は、『ニュー・ワールド』(05年)以来6年ぶり、5作目となるテレンス・マリック監督の本作がパルムドール賞を獲得! 河瀬直美監督の『朱花の月』と三池崇史監督の『一命』を押しつけてなぜ本作が? それは、本作を観れば誰でもすぐにわかるはずだ。

本作のテーマは、父と息子の確執。時代は、1950年代の古き良きアメリカ! あの時代と60数年後の今を対比させながら、教育とりわけ家庭教育の大切さと父子の絆のあり方を、本作からじっくりと学びたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■こりゃ必見! やっぱパルムドール賞作品は! ■□■

2011年5月に開催された第64回カンヌ国際映画祭に向けて、日本からは河瀬直美監督の『朱花の月』と三池崇史監督の『一命』がコンペ部門に出品されたが、結果的にはいずれもダメ。日本の新聞は「前評判がいい」とかなり好意的に書きたてていたが、客観的かつ冷静な私の見方はシビアだった。しかし結果的には、本作のようなすばらしい作品がコンペ部門で予想どおり(?)、最高峰たるパルムドール賞受賞! なお、5月25日付読売新聞は、「ある視点」部門の最高賞を受賞した韓国のキム・ギドク監督の授賞式でのスピーチを紹介した。次々と新作を発表するキム・ギドク監督は私が韓国で最も注目し続けている監督だが、これは私にとって実にうれしいニュースだった。

それはともかく、本作の最大の注目度はブラッド・ピットとショーン・ペンの共演だ。ショーン・ペン演じるジャックは、ブラッド・ピット演じる厳格な父オブライエンの長男。したがって、2人が直接絡むシーンはないが、それぞれハリウッドを代表する演技派俳優

としての静かな熱演を見せている。とりわけ、ブラッド・ピットは本作でアカデミー賞主演男優賞にノミネートされるのではという話も・・・？もっとも、本作で一番多く登場するのは、子供時代の長男ジャック（ハンター・マクラケン）、次男R. L.（ララミー・エップラー）、三男スティーブ（タイ・シェリダン）の3人だが、この3人の子役たちは全員ズブの素人らしい。

時代は1950年代、舞台はテキサス。あの時代のアメリカの田舎町における家族の在り方とは？そしてまた、父と息子の在り方とは？

■□■テレンス・マリック監督とは？■□■

プレス・シートは「伝説の映画監督」としてテレンス・マリック監督のことを詳しく紹介している。彼は、1973年の『地獄の逃避行』（劇場未公開）で監督デビューを果たしてから本作までわずか5作品しかないが、だからこそ彼の作品に参加したい映画人は門前市をなすほどらしいから、大したものだ。私が観たのは『シン・レッド・ライン』（98年）と『ニュー・ワールド』（05年）（『シネマルーム10』331、332、335、337頁参照）の2本だけ。

もっとも、私はベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した『シン・レッド・ライン』をそれほど素晴らしい映画とは思えず、むしろ『プライベート・ライアン』（98年）の方に感銘を受けた。また、『ニュー・ワールド』の斬新な映像美にはびっくりしたが、ナレーションの多様ぶりは少し鼻についた。また、「万人向けではなかったためか」、『ニュー・ワールド』の興行面は期待はずれだったらしい。

■□■本作のテーマはこの監督の手法は？■□■

そんなテレンス・マリック監督が『ニュー・ワールド』から6年ぶりに発表した本作のテーマは、父と息子の葛藤だ。成功するためには力が必要だと考えている厳格な父親と、自然をめで慈愛に満ちた心で子供たちを包み込む優しい母親との間に生まれ育ち、11歳になった長男ジャックは、今どんな心境に？私は1949年生まれたから、ほぼジャックと同じ世代。また、厳格な父を恐れおのきなながら育った少年時代もジャックと共通しているから、ジャックの気持には大いに共感することができる。俳優が直接セリフとしてしゃべるよりもナレーション的な語りの方が圧倒的に多い本作はきわめて異色だが、『ニュー・ワールド』とは全く異なるそんなテーマには、そんな手法がぴったりだ。

他方、美しい映像と斬新なカメラワークは、まさにテレンス・マリック監督の独壇場。テレンス・マリック監督は『シン・レッド・ライン』でベルリン国際映画祭金熊賞を、本作ではカンヌ国際映画祭パルムドール賞という2冠を獲得したわけだが、もう一つアカデミー賞の監督賞、作品賞は？

■□■アメリカは「男女平等」の国?■□■

普通の芝居は、カメラに向かってセリフをしゃべりながら演技をし、その出来の良し悪しを見てもらうが、本作は基本的にセリフと演技が切り離されており、身体の動きや表情だけでその時の気持や状況を表現しなければならないから大変。しかして、テレンス・マリック監督がブラッド・ピットとショーン・ペンという2大ビッグネームとは全く違う視点から、オブライエンの妻役に抜擢したのが、無名とまでは言えないが、全然ビッグネームではない1981年生まれ的女優ジェシカ・チャステイン。

「レディファーストの国」アメリカは昔から男女平等の国だったように誤解されているが、1950年代の「古き良きアメリカ」における男女差別は、ジュリアン・ムーア主演の『エデンより彼方に』(03年)を観ればよくわかる。あの時代の上流家庭における理想的な良妻賢母でもあんな試練が待ち受けていた(『シネマルーム3』165頁参照)のだから、厳格ながらも勤勉な夫と3人の男の子たちに囲まれながら、美しい自然の中で暮らすオブライエン夫人はある意味理想的とも思えたが、実は・・・?

■□■この女優は「一発屋」にあらず!■□■

夫のあまりにも厳格な躰に戸惑う妻、「お前の育て方が悪いからだ!」と子供たちが父親に反発する責任をすべて押しつけられて潰れそうになる妻、それでもなお子供たちや夫への愛情を失わず懸命に尽くす妻、そんな1950年代の古き良きアメリカの一種理想的な妻の姿をジェシカ・チャステインが見事に演じている。

テレンス・マリック監督は『ニュー・ワールド』で「ポカホンタス伝説」のキーウーマンとなる若手女優として、インディオのケチャ/ウアチャパエリ族、アラスカ、スイスの血を引くという16歳の少女クオリアンカ・キルヒャーを発掘したが、それについては『一発屋』の危険性も・・・?と指摘した(『シネマルーム10』336頁参照)。しかし、本作のジェシカ・チャステインの場合、テレンス・マリック監督は次回作での起用も決めているらしいから、そんな心配は全くなし!

■□■家庭教育のあり方を、本作からじっくりと!■□■

日本は1945年8月15日の敗戦によって、急遽それまでの軍国主義国たる大日本帝国から民主主義国たる日本国へと180度転換した。それに伴って憲法はもとより、子供たちへの学校教育も家庭教育も大転換!それまでは「鬼畜米英」と叫んでいた学校の先生たちが突然、民主主義の大切さを教え始めることになったのだから、その欺瞞性は明らかだ。それから66年後の今、総理大臣の地位にしがみつくと菅直人首相をはじめとする日本国の無惨さが顕著に。他方、ヨーロッパのドイツやイタリアでは、福島原発事故の後、いち早く原発中止の方向性を指導者の英断や国民の総意によって決定したし、アメリカは

相対的な力の衰えは目立つものの、まだまだ世界に冠たる民主主義国家としての根底は揺らいでいない。アメリカの強さは、本作が描いた1950年代の「古き良きアメリカ」の家族のあり方が今も根本的に変わっていないことが大きな要因だ。

戦前の日本は、大家族主義の下で老・壮・青・少・幼が助け合い支え合いながら生きてきたが、戦後の高度経済成長の中で核家族化が進んだ日本国では、「家族」は崩壊寸前だ。私が興味と関心を持っている中国では、1966年から1977年まで続いた文化大革命の洗礼を全く受けていない「80后（バーリーホー）」がキーワードだが、さて、その功罪は？私の評価では、家族のあり方については日本も激変したが、中国の激変はそれ以上。しかしそれに比べると、ヨーロッパやアメリカにおけるその変化は極めて小さい。どちらがよいのかはその人の判断だが、父と息子の絆（確執）をテーマとして描いた本作から、教育それも学校教育ではなく家庭教育のあり方について、日本や中国と対比しながら、アメリカにおけるそれを本作からじっくりと考えてみたい。

■□あなたの神は？テレンス・マリック監督の神は？■□

ヨーロッパでもアメリカでも、子供たちは定められた時間に眠りにつくのは当たり前。今ドキの日本のように、自分の部屋で好き放題にTVを観たり、TVゲームに興じたりという環境は欧米ではありえないが、今ドキの多くの日本人はそれがわかっていないのでは？そんな欧米における生活のリズムを支えるのがキリスト教への帰依だということが、本作を観ればよくわかる。オブライエンが音楽家を目指していたというのは結構意外だったが、そうかといって3人の子供たちに自分が弾くオルガンをじっくりと聴かせたり、ブラームスの交響曲をレコードで理解させようとするのは少しムリがあるのでは？オブライエンは厳格な父親で、オブライエン夫人は優しい母親だが、2人ともキリスト教を深く信じている人間だから、食事前には欧米諸国では当たり前の神への感謝の言葉を述べたうえで食べることに。しかし、オブライエンのような厳格な教育方針では、その食べ方がこれまた大変。

そんなシーンをみて私は私の小学生時代の食事風景を思い出した。わが家の食卓は本作ほどリッチではなかったが、子供が好き嫌いを言うことは決して許されず、大嫌いなほうれん草をムリヤリ口の中につめ込まれるという父親の家庭教育の厳格さは本作と同じだった。オブライエンの場合は、聖書と神の教えにもとづいて愛する子供たちが強くたくましく生きていけるようにという願いを込めてこんな教育を施していることはよくわかるのだが、さてわが家では？

テレンス・マリック監督は1943年生まれだから、本作を監督した時は既に68歳。そんなこともあってか、本作ラストのシークエンスでは何とも神がかり的な風景が描かれ、潮に洗われる海辺に過去・現在・未来を問わず多くの人物たちが登場する。ひょっとしてこれは、今テレンス・マリック監督が頭の中で思い描いている神の国の姿？信仰心の薄い

私にはそれを知る由もないが、やはり欧米の文化とそこにおける父VS息子の確執を理解するためには、神＝キリスト教の理解が不可欠だと実感！

2011（平成23）年6月18日記

「弁護士列伝」の取材でスタンス変更？

1) 昨今は何でも「宣伝が命」だからコマーシャルイズムに走る弁護士はその方面にやけに熱心。しかして、怪しげなコンサルタントが流行るのだが、多くの弁護士が加入しているという「弁護士ドットコム」とは？

2) 私は04年に出版した『いま、法曹界がおもしろい』（民事法研究会）で、第5章「はばたけ！ 弁護士一より広い世界へ」、第6章「坂和流法律事務所経営術」を展開すると共に、第4章「弁護士像あれこれ」の中の「坂和流弁護士タイプ別分類」では、①書き弁VSしゃべり弁、②依頼者迎合型VS依頼者教育型弁護士という持論を展開した。そんな坂和流弁護士像では、もちろん宣伝は無用。

3) そんな私に2011年9月、ホームページを見て、弁護士ドットコムの「弁護士列伝」というコーナーに私を掲載したいとのメールが入った。当初は半信半疑でそのシステムを確認し、有料か無料かにもトコトンこだわったが、結局何の問題もないうえ、大いに名誉なことだ、との結論になった。そこで、まずはネット上のインタビューに答えたが、書き始めるとこれがかなりのボリュームに。さらに、これをたたき台として直接インタビューをしたいとの申し出に応じて、東京出張の機会に合わせてそれをセット。

いいたい放題、しゃべりたい放題で若い女性の取材者に私の思いをぶちまけたところ、それが意外にも好評で、弁護士列伝NO. 635として弁護士ドットコムに掲載されることになった。

4) パソコンの画面で見る私の笑顔も結構イケてる感じ。また次の7つの質問に対する私の回答も堂々としたものだ。

Q1. なぜ、弁護士になろうと思われたのですか？

Q2. 弁護士のお仕事の中で嬉しかったことは何ですか。

Q3. 弁護士になって一番大変だと感じることは何ですか。

Q4. 弁護士としてお仕事をやる上で意識していることは、何ですか。

Q5. 先生は、弁護士でいらっしゃる傍ら、文筆家、映画評論家としても活躍なさっていますが、どうしてですか。また両立の秘訣はありますか。

Q6. 今後の弁護士業界の動向はどうなるとお考えでしょうか。

Q7. ページを見ている法曹界を目指している方に向けてのメッセージをお願いします。

5) 今まで「宣伝なんて！」とバカにしていたが、今回の取材を通して少しはスタンスを変更しなければ・・・。

2011（平成23）年11月9日記